

「安芸之介の夢」に表出する
ラフカディオ・ハーンの昆虫への興味

矢 次 綾

松 山 大 学
言語文化研究 第42巻第2号（抜刷）
2023年3月

Matsuyama University
Studies in Language and Literature
Vol. 42 No. 2 March 2023

「安芸之介の夢」に表出する ラフカディオ・ハーンの昆虫への興味

矢 次 綾

I 序

『怪談』(*Kwaidan: Stories and Studies of Strange Things*, 1904)に収録された「安芸之介の夢」(“The Dream of Akinosuké”)は、主人公が夢の中で常世(“Tokoyo” 263)の国を訪れる物語である¹⁾。作者のラフカディオ・ハーン(Lafcadio Hearn, 1850-1904)は、常世に注を付け、「極東のお伽話に出てくる蓬萊(Horai)」である可能性を示唆している(268-69)。ハーンの蓬萊に対するこだわりは、同じく『怪談』に掲載されたエッセイ「蓬萊」に顕著に表れている。その中でハーンは、「死も苦しみもなく、冬もない」という蓬萊の特徴が2100年前の中国の書物に記されている(“Horai,” *Kwaidan* 190)と述べるなどしており²⁾、蓬萊が中国に由来することを明示している。ただし、「安芸之介の夢」の原拠と考えられる「槐宮記」で³⁾、主人公が赴くのは槐安国、すなわち「槐の木の下の穴にいる蟻の国」(「槐安の夢」『日本国語大辞典精選版』第2版第3巻 152)であり⁴⁾、蓬萊やそれに類する地である可能性は示されていない。なお、「槐」は中国原産のマメ科の落葉高木(前掲書第2巻 751)だが、ハーンは槐をヒマラヤスギ(a great ancient cedar-tree [*Insect* 161])と言い換えている⁵⁾。要するに、安芸之介が夢の中で常世もしくは蓬萊を訪れたという設定はハーンの創作である。

槐安国が常世もしくは蓬萊に置き換えられていることから、ハーンが浦島伝説を念頭に置きながら「安芸之介の夢」を執筆したと推測できる。浦島が赴く

異界をハーンが蓬莱と見なしたことを裏づけるかのようには、ハーンは「蓬莱」において、かの地には「三日月のような屋根を持つ竜王の城」(*Kwaidan* 190) すなわち竜宮城があり、周囲は「ただ空と海のみ」(189)によって囲まれていると記述している。ハーンは『怪談』出版の約10年前、「夏の日の夢」(“The Dream of a Summer Day,” *Out of the East: Reveries and Studies in New Japan*, 1985) 第2部で再話した浦島伝説において、浦島が青い海原を越えて訪れた場所を「常夏の島 (the island where summer never dies)」(13)と呼んでおり⁶⁾、そこが「死も苦しみもなく、冬もない」(*Kwaidan* 190) 蓬莱であることを示唆していた⁷⁾。安芸之介が常世に向かう様子を描写するとき、ハーンは常世が海に囲まれていることに言及していないが、帰郷する様子を描く際には「(安芸之介を乗せた) 船は青い海へと漕ぎだした」(*Insect* 267)と叙述している。浦島が「竜王の娘 (the Dragon King of the Sea)」と結ばれるように、安芸之介は常世の王の娘を妻に迎える。この点にも、この2つの物語の関連性が示されている。もっとも、「死の苦しみ」がないはずの常世で安芸之介は妻と死別し、それが、国王によって彼が帰郷させられる理由になるが、常世もしくは蓬莱の「死の苦しみがない」という特徴と矛盾する不幸に遭っていても、ハーンが安芸之介に浦島を投影させていないとは言えないだろう。以上より、ハーンは「安芸之介の夢」の常世に注を付け「極東のお伽話に出てくる蓬莱」と記したとき、浦島伝説を頭に浮かべていたはずである。なお、竜宮城での浦島の経験は夢の中の出来事だと解釈した人物として、森鷗外(1862-1922)がいる。その証拠に、鷗外はワシントン・アーヴィング(Washington Irving, 1783-1859)の「リップ・ヴァン・ウィンクル」(“Rip Van Winkle,” *The Sketch Book of Geoffrey Crayon, Gent.*, 1819)を1889年に翻訳し、「新浦島」というタイトルを付けている。言うまでもなく「リップ・ヴァン・ウィンクル」はタイトルと同名の主人公が、一夜の夢から目覚めたはずが、実際には20年の年月を眠ったまま過ごしていたことを知って啞然とする(46)物語である⁸⁾。

以上のように、「安芸之介の夢」は浦島伝説を彷彿とさせる物語であり、浦

島に対するハーンの興味を裏づける作品の一つだと解釈できる。ただし、この二つの物語には決定的な違いがある。その違いは何か。その違いを明らかにすることから始め、ハーンの別の側面を浮かび上がらせたい。

Ⅱ 「安芸之介の夢」と浦島伝説の違い

「安芸之介の夢」と浦島伝説とでは、人物と読者の両方を奇怪に思わせる点が大きく異なっている。浦島伝説において主人公自身や読者が衝撃を受けるのは、主人公が異界——多くの場合、竜宮城——から現実世界に戻った後、自分が経たと思っていた時間よりも遥かに長い時間を経たことに対してである。「夏日の夢」第2部でハーンが再話したヴァージョンについて言えば、浦島が蓬莱から故郷に戻ると400年以上の年月が経過しており、自分の墓さえ作られている(17)。浦島は自分が「何らかの奇妙な幻想(some strange illusion)」の犠牲になっていると考え、その原因を解明すべく、「竜王の娘」に渡された小箱を開ける。するとそこから「白く冷たい霊気のような蒸気(a white cold spectral vapour)が夏の雲のように立ち上がり」、浦島は「400年分の冬の重み(the weight of four hundred winters)」(18)によって押しつぶされてしまうのである。

「リップ・ヴァン・ウインクル」の場合、主人公が夢の世界という異界で我知らず経ていたのは20年間である。すなわち、目覚めると老人になっていたリップは、成人して家庭を持った娘に養われ、「村の長老であり、『独立]戦争以前の』古い時代の年代記」(47)として扱われるようになるに過ぎないが、浦島は異界に赴いている間に無意識的に経ていた膨大な時の経過を、あるきっかけによって一瞬のうちに経験し、心身共に朽ち果てる。同様の結末はケルトの伝説「青春の島オシーン」(“Oisín in the Land Youth”)にも描かれている⁹⁾。なお、「青春の島オシーン」と浦島伝説の類似性については、例えば土居光知が『神話・伝説の研究』(1973)第1章「神話・伝説の伝播と流転」の中で、

「うた人トマス」(“Thomas the Rhymer”, スコットランドのボーダーズ地方 [the Scottish Borders, aka Mairches, Criochan na h-Alba] に伝わるサー・トマス・デ・エルシルドゥン [Sir Thomas de Ercildoun, aka Thomas the Rhymer, Thomas Learmont or True Thomas] の伝説) も合わせて分析し、これらの伝説のルーツを中央アジアに伝わる楽園伝説に見出している (70-89)。ケルトの英雄オシーン (Oisín, aka Oisín, Osian, Ossian) が訪れた異界「青春の島」は、果実が豊かに実り、金や宝石がたやすく手に入るだけではなく、「古いも死も存在しない」(Over Nine Waves 216) と説明されていることから、「死も苦しみもなく、冬もない」(Kwaidan 190) 蓬萊を彷彿とさせる。要するに、浦島伝説と「青春の島オシーン」の背後には楽園伝説があると考えられ、その楽園では、現実世界よりもはるかに速く時が過ぎゆくという共通点が見られる。

一方、安芸之介や、彼の物語の原拠「槐宮記」の主人公、^{じゅん とう ほん}淳于棼は、うたた寝に収まる以上の時間を夢の中で過ごしているように見えるが、目覚めて現実世界に戻れば、眠っていた分だけの時間が経過しているに過ぎず、眠りに就く前の生活が継続する。それでは、彼らの物語の奇怪な点は何だろうか。結論を先に言えば、主人公が実際に蟻の世界を訪れていた可能性が、物語の結末で強く示唆されていることである。「安芸之介の夢」について言うなら、目覚めたばかりの安芸之介が、傍で酒を飲んでいた友人たちに夢の話をする時、友人の一人が次のように言う。

We also saw something strange while you were napping. A little yellow butterfly was fluttering over your face for a moment or two ; and we watched it. Then it alighted on the ground beside you, close to the tree ; and almost as soon as it alighted there, a big, big ant came out of a hole, and seized it and pulled it down into the hole. Just before you woke up, we saw that very butterfly come out of the hole again, and flutter over your face as before. And then it suddenly disappeared : we do not know where it went. (*Insect* 267)

それに続けて、もう一人の友人が「おそらく蝶は安芸之介の魂だ」(268)と指摘する。夢を見る人の魂が蝶になってさまようというイメージは、莊周(BC 369-268, aka 莊子)が『莊子(内篇)』齊物論篇の中で「胡蝶の夢」として描き出したものである。ハーンはそれについて「昆虫の研究」(“Insect-Studies”)の一編として『怪談』に収録しているエッセイ「蝶」(“Butterflies”)の中で、次のように述べている。

I should like to know more about the experience of that Chinese scholar, celebrated in Japan under the name of Soshu, who dreamed that he was a butterfly, and had all the sensations of a butterfly in that dream. For his spirit had really wandering about in the shape of a butterfly [...]. (*Insect 2*)¹⁰

夢うつつの状態で朦朧とする意識を、ハーンは「夏の日の夢」では「魂というぶよ蚋(The gnat of the soul)」(20)と呼んでいるが、それは「胡蝶の夢」を以前から知っており、意識がどこに漂っていくとも知れない下意識(subconsciousness)の状態と、どこに行くともみれず不規則的に動く昆虫と重ね合わせる莊周の視点に感銘を受けたためであろう。

蟻を調べてはどうかという友人の意見に賛同し、安芸之介は自分の魂と考えられる蝶が引きずり込まれた蟻の穴を友人と共に調べてみる(*Insect 268*)。すると、そこには「奇妙にも小さな町に似たもの(an odd resemblance to a miniature town)」があり、「黄色っぱい羽根と長くて黒い頭をもった1匹の巨大な蟻」に小さな蟻たちが群がっている¹¹。安芸之介は巨大な蟻こそが、夢の中で遭遇した常世の国王だと考え、王女すなわち夢の世界における彼の妻の墓もあるのではないかと探してみると、「仏教徒の碑によく似た形の小石(a water-worn pebble, in shape resembling a Buddhist monument)」があり、その下に雌蟻の死骸を発見する。要するに、夢の中で見たのと酷似した情景を蟻の巣の中に見出し、彼らも読者も、下意識の状態に陥った安芸之介の魂が蝶となって蟻の巣を

訪れ、その中で一定の時間を過ごしたことを、夢の中での非現実的な出来事として必ずしも一掃できなくなる。ハーンはこの点を「安芸之介の夢」における奇怪さとして表現しようとしたのである。

Ⅲ 「安芸之介の夢」に書き込まれた蟻社会の現実性

安芸之介とその友人たちが蟻の巣を調べる場面に、雌蟻の死を悼むために建てられた墓らしきものを書き込むことにより、ハーンは、夢の中で安芸之介の妻だった常世の王女の墓（“a monument, exceedingly splendid” 266）が建てられていたことを、登場人物と読者の両方に想起させる。そうすることを通してハーンは、安芸之介の魂が実際に蟻の社会を訪れた可能性に加え、「一寸の虫にも五分の魂」がある可能性を匂わせるファンタジーを創作していると解釈することができる¹²⁾。ただし、ハーンは「安芸之介の夢」における蟻社会全体をファンタジーとして描いているわけでは必ずしもないだろう。牛村圭が「虫の研究」の一編であるエッセイ「蟻」（“Ants”）を吟味しながら解明しているように（「虫めづるハーン」158-59）、ハーンは蟻についての豊富かつ正確な知識を持っていた。この点を念頭に置き、「蟻」と比較しながら「安芸之介の夢」を再読するなら、ハーンは、安芸之介たちが蟻の巣を調べる場面だけではなく、安芸之介の魂が蟻の社会を訪れていると解釈できる場面も、そのような知識をもとに描いたと考えられる。

蟻に限らず昆虫に強い興味を持っていたハーンの文化的、思想的背景として、彼が生きた19世紀、イギリスは「博物学の全盛期（the heyday of natural history）」（Clark 9）であり、それに先立つ18世紀の半ば以降、アマチュアも含め多くの学者が昆虫を観察し、その成果を公表していたことが挙げられる。牛村がハーンには「蟻社会を人間社会に擬人化して描く」（160）傾向があると指摘しているが、蜂の社会も考慮に入れるなら、それはハーンだけの傾向だと言えないだろう。昆虫が社会を形成していたと同時代の昆虫学者が認識してい

た証拠の一つとして、例えば、デイヴィッド・シャープ (David Sharp, 1840-1922) が「ある種の昆虫による組織化された社会の形成は、非常に興味深い現象である。というのは、人間と昆虫以外の動物はこのような存在の仕方をしていないからだ」(Clark 77) と述べている。ヴィクトリア朝の人々は、昆虫の中でも蜂と蟻を社会性昆虫 (social insects [Clark 70]) と見なし、その社会性について考察した。人間の社会と蜂の社会を重ね合わせて描いた例として、挿絵画家のクルックシャンク (George Cruikshank 1792-1878) が1840年に最初に製作し、1878年に改作した「イギリスという蜂の巣」(“The British Bee Hive”) がある¹³⁾。クルックシャンクは女王を頂点にしたイギリスの階級社会を蜂の巣として描いた。換言すれば、女王蜂を頂点とする蜂の社会をイギリス社会の縮図と見なし、人間社会のあり方を揶揄したのである。

ハーンは「蟻」の中で、前出のシャープが『ケンブリッジ博物誌』(Cambridge Natural History, 1899) の中で展開している論——「社会生活を大いに容易にする産業のいくらかの取得において、昆虫は我々よりも周到である」(Insect 26) という論——を引用し¹⁴⁾、彼の敬愛する哲学者ハーバート・スペンサー (Herbert Spencer, 1820-1903) の「さらに進んでいると考えられる論」について述べるきっかけにしている。すなわち、牛村が「蟻」を「スペンサー流の進化論と蟻の営む社会生活とを考えあわせ人間社会を風刺した作品」(「虫」630) と呼んでいるように、ハーンはこのエッセイの中で、虫に対して一般に持たれているであろう認識とは裏腹に、蟻がいかに効率的で倫理的な社会生活を営んでいるかについて述べている。ハーンがそうした背後に、彼の個人的な志向だけではなく、同時代のイギリス及び日本の知的流行があると考えられる。イギリスについて言えば、前段落で述べた博物学の流行があり、スペンサーは「科学の信義を信じる」人物の一人として、進化論的立場からその流行に影響を与えた (Clark 84-85)。大塚英志によれば、スペンサーは「明治期の日本における進化論的教養の基本ともなった人物」(83) でもある。このような日英の知的背景の中で、大塚の言葉を借りるなら「常に同時代の知的流行に忠実」(133)

なハーンは昆虫を観察すると同時に読書を通して情報収集し、エッセイを書いたと考えられる。ハーンが作品にただ昆虫を登場させるのではなく、このような姿勢を持っていたからこそ、昆虫学者の小西正泰（1927-2013）が、「わが国の昆虫文学を語るとき、八雲を避けては通れないほど、その作品は質・量ともに抜きん出ている」（229）と著書『虫の文化誌』（1992）の中で感嘆しているのであろう。

ハーンは「安芸之介の夢」の中で、クルックシャンクの「イギリスという蜂の巣」ほど精密ではないにしても、蟻の世界を階級社会として描いている。夢から覚めた安芸之介が蟻を観察する中で、「奇妙にも小さな町に似ているもの」（*Insect* 268）を蟻が築いており、その中心部にいる「黄色っぽい羽根と長くて黒い頭をもった1匹の巨大な蟻」に小さな蟻たちが群がっていることに気づく場面である。もっとも、「安芸之介の夢」に書き込まれたハーンの昆虫に関する知識は、この物語を念頭に置きながら「蟻」を吟味することを通してより明らかになると考えられる。例えば、母になる蟻が特別な地位にあることを、ハーンが説明する「蟻」第4節における次の箇所である。

One special class of females, — the Mothers-Elect of the race. — do condescend to consort with males, during a very brief period, at particular seasons. But the Mother-Elect do not work ; and they must accept husbands. (31)

夢の中での安芸之介の妻は王女であり特別な階級に属する。だから死後は丁重に葬られる（266）のだが、物語の最後で発見される雌蟻も「仏教徒の碑」（268）のような石の下に丁重に葬られており、母となるべく選ばれた特別な蟻だったと解釈できる。こういった共通点から、安芸之介の魂が実際に蟻の世界に行った可能性を、登場人物も読者も否定しづらくなるわけである。上の引用を裏づけるかのように、常世の王女は安芸之介を夫として受け容れ、7年という限られた期間、夫婦として生活し、7人の子供を成すと亡くなってしまう。母にな

るべく選ばれた蟻 (the Mothers-Elect) の配偶者が子供の父親としての役割を課されるように、安芸之介は妻が亡くなると国王の命令によって生国すなわち現実世界に送り返され、子供たちは国王の孫だという理由で常世に残っている (266)。

牛村が特に驚嘆しているのは、アメリカリなどの単性生殖についてのハーンの知識に対してだが (「虫めづるハーン」159)、ハーンは前段落で部分的に引用した「蟻」第4節に続く第5節でこの点について記し、蟻の最も進化した形態と見なしている。ハーンはその前段階として、昆虫がただ社会を形成しているのではなく、個の欲求充足というよりも「社会の繁栄」や効率的な「種の維持」を優先する点で「人間を超えている」というスペンサーの論 (*Insect* 26-27) に第2節で共感を示す。さらにハーンは蟻の生殖について第4節で述べた上で、第5節冒頭で「蟻の生活の最も進んだ形態の一つとして、大多数の個体において性が完全に消滅している」(33) と記し、アメリカリその他の単性生殖をする蟻の先進性を主張しているのである。しかも、ハーンは、そのような生殖方法に、種の保存という点での効率性だけではなく、倫理的な示唆 (ethical suggestion) さえ読み取っている。つまり、ハーンは、単性生殖をする蟻が「性的能力を蟻が自発的に抑圧もしくは調整しているように見える (*this practical suppression, or regulation, of sex-faculty appears to be voluntary*)」(33-34, イタリック体はハーンによる) と述べ、「蟻たちは本能の中でも最も手強く制御不能だと一般に考えられているものを、完全に管理することに成功している」と感嘆している。ハーンはこの点に、蟻の先進性を読み取っているのである。

「安芸之介の夢」の中で主人公が生活を共にしたと想定される蟻は、単性生殖するほどに「進んだ形態」にあるわけではない。そうだとすると、ハーンは、安芸之介と妻 (である雌蟻) や、その間に生まれた子供との関係を比較的淡々と描くことを通して、彼らが「性的能力」を「自発的に抑圧もしくは調整して」効率的に「種の維持」を図る様子を仄めかしているのではないだろうか。換言

すれば、異界に赴く理由として、安芸之介は国王の家来が迎えに来て、王女と結婚する義務があると告げられたから従ったに過ぎない(263-64)。一方、「夏の日の夢」でハーンが再話した浦島伝説や「青春の島オシーン」では、異界の女性に対する主人公の恋愛感情がその理由になっている。オシーンや浦島は不意に現れた美しい異界の女性に魅了され、異界へと誘われるのである。後者が「竜王の娘」に誘われた理由を、ハーンは「彼女がどんな人間よりも美しく、浦島は彼女を愛さずにはいられなかった」(*Out of the East* 13) からだと明記している。マリー・ヒーニーが再話したヴァージョンにおいて、オシーンは、異界の女性ニアム(Niamh)の「美しさに目がくらみ、彼女が愛する人として、他の誰でもない自分の名前を言うのを聞いたとき、頭の前からつま先まで震えが走る」(*Over Nine Waves* 216) のを覚え、「喜んであなたと結婚します」と宣言すると、ニアムと共に異界へ向かう。それでも望郷の念に駆られ、現実世界に戻りたいという意思を示す浦島とオシーンに、竜王の娘とニアムは別れ難さを表明するというよりも、夫の自分に対する愛情を試すかのように、前者は、自分のもとに戻りたいなら開けてはいけなと言いながら小箱すなわち玉手箱を手渡し(*Out of the East* 15)、後者は故郷の土に触れてはいけなと申し渡す(*Over Nine Waves* 220)。一方、安芸之介は妻の死に際し「もはや生きていたくないほどの悲しみ」(*Insect* 266) を覚えるが、それは7人の子供を成した妻に対する家族愛であり、浦島伝説などに読み取れる男女間の情念とは異なる感情だと解釈すべきであろう。ただし、子供に対する安芸之介の愛着は特に記されておらず、国王に命じられるままに彼は常世を去っている。なお、「槐宮記」の場合、布村の和訳によれば、主人公と王女の結婚は「安芸之介の夢」と同様、王の命令であり、結婚後に夫婦愛が「日増しに深まって」いる(80)。主人公が子供を残して帰国する経緯について、彼が国を恐慌に導くという占いの進言によると説明されているが、妻の忘れ形見である子供たちへの彼の愛着は特に記されていない。以上より、ハーンは、男女間の情念ではなく、子を成し家族を形成するための夫婦の愛情が「槐宮記」に描かれている

点と、彼が蟻の生殖に見出した倫理的な示唆に共通性を見出しながら「槐宮記」を語り直し、「安芸之介の夢」を作り上げたと考えられる。

Ⅳ 結 び

以上、本稿では、「安芸之介の夢」を、浦島伝説のように、主人公の異世界への旅を描いた作品であると同時に、ハーンが読書や観察をもとに考察した蟻の世界と「槐宮記」における異界との共通性を見出しながら再話した作品として解釈した。その際に、浦島伝説との違いも明らかにした。昆虫に関する彼の興味や知識が「同時代の知的流行」（大塚 133）を反映していることも確認したが、ハーン自身が『怪談』の「序文」（9）で示唆しているように、原拠と考えられる「槐宮記」や莊周の「胡蝶の夢」といった中国の文学・文化に対するハーンの興味を表出していることもまた確認することができた。

さらに、安芸之介と友人たちに「仏教徒の碑によく似た形の小石」（*Insect* 268）の下に雌蟻の死骸を見つけさせることにより、ハーンが、安芸之介の体験を夢の中での出来事として必ずしも一掃できなくするだけでなく、「一寸の虫にも五分の魂」があることを暗示している可能性にも言及した。この点は、霊魂は人間にのみ宿り、虫や獣にはないと見なすキリスト教文化へのハーンの遠まわしの批判と解釈することも可能であろう。もっとも、「安芸之介の夢」だけを吟味して、この点について解明するのは困難だが、「蟻」第2部の冒頭に、次の引用のように記されていることを考慮すれば、ハーンが昆虫に対する人間の上から目線と、他の文明に属する者に対するキリスト教徒の目線を重ね合わせ、蟻の進化について述べると同時にキリスト教批判を行っていると考えることができるのではないだろうか。

For the same reason that it is considered wicked, in sundry circles, to speak of a non-Christian people having produced a civilization ethically superior to our

own, certain persons will not be pleased by what I am going to say about ants.
(26)

ハーンが「蟻についてこれから述べようとしていること」とは、蟻に比べれば人間が十分に進化していない (man is yet imperfectly evolved) (27) ということを指しているが、そうする際に彼は、蟻が人間とは異なり、「個としてよりも種としての繁栄を優先している」点で有能であるというスペンサーの論 (26-27) を援用している。

先進的に見える西洋のやり方を、ハーンが昆虫を引き合いに出しながら批判している可能性について言えば、「蟻」や「蝶」と共に「昆虫の研究」として執筆された「蚊」(“Mosquitoes”) に目を向けるべきだろう。その中でハーンは、アメリカの昆虫学者ハワード (Leland Ossian Howard, 1857-1950) が著書の『蚊』(Mosquitoes) で提唱している「近隣から蚊を除去するなら、蚊が増殖している澱んだ水に少量の石油もしくは灯油を注げばよい」(Insect 19) という科学的かつ先進的な方法が¹⁵⁾ 自分自身の近隣の寺の墓地で採用された場合について考察しているが、ハーンの関心は、蚊の撲滅というよりも墓地が被るであろう損害へ、さらに、死後の自分が蚊に生まれ変わった場合へと推移している。すなわち、「蚊」の冒頭の「自分の身を守るためにハワード博士の『蚊』を読んでいる」(19) という一文を読むとき、おそらく読者のほとんどは「自分の身を守る」とは「自分が蚊に刺されないようにする」ことだろうと解釈するであろうが、実際には、蚊を守ることと自分たちを守ることは同意であるとハーンが示唆していることがわかる。その理由は、蚊を撲滅させるためにハワードの方法を用いれば、人間の居住環境やそこに存する伝統が破壊されることになること、ハーンが実際には主張しているからである。要するに、ハーンは「蚊」においても「蟻」の場合と同様、何が先進的なのかについて、昆虫を引き合いに出しながら読者に問いかけている。換言すれば、「一寸の虫」に「五分の魂」以上のものがあるとハーンは見なしているようである。そのようなハ

ーンの考えは、「虫の研究」ほど直接的でないにしても、「安芸之介の夢」にも反映されていると考えられるのである。

注

- 1) 「安芸之介の夢」からの引用は、昆虫に関するハーン作品のアンソロジーで、引用文献に挙げている *Insect Literature* に依拠している。*Insect Literature* は、1921年に大谷正信 (aka 大谷繞石, 1875-1933) が編者かつ注釈者として北星堂出版より1921 (大正10) 年に出版した『小泉八雲—— 蟲の文学』に依拠し、虫に関する10編の著作を加えて2015年にダブリンのSwan River Pressから出版されている。この版には大谷によるタイトルの漢字表記も掲載されており、本稿で用いたAkinosukéの漢字表記はそれに倣っている。2016年にはフランス語版 *Insectes* がLes Édition du Sonneurから出版されている。なお、筆者が用いたのは、2020年に出版されたSwan River Pressのペーパーバック版である。牛村圭が「虫めづるハーン」冒頭で、ハーンが『怪談』の作者として認識され「多方面での活躍の跡は、二義的なもの、不随的なものとして捨象されているくらいが窺える」(156) と嘆いているが、アイルランドとフランスでこのようなアンソロジーが相次いで出版されていることは、ハーン理解が21世紀になって拡大もしくは深化した証左だと言えるのではないだろうか。それらのアンソロジーのもとである『蟲の文学』の編者かつ注釈者の大谷は、松江尋常中学校及び東京帝国大学でのハーンの教え子であり、昆虫に関する素材や情報のほとんどは大谷によって提供されたと考えられる (小西 231)。牛村は素材や情報の提供者として、大谷の他に「妻節子の遠縁にあたる東京帝大史料編纂部勤務の三成重敬」を挙げ、「ハーン自身も、生物学や昆虫学の欧文専門書をかなり有していた」と述べている (牛村「虫」630)。
- 2) 「蓬萊」からの引用は、引用文献に挙げているハーンの *Kwaidan* に依拠している。
- 3) 「安芸之介の夢」の原拠は、南條竹則によると『校訂馬琴傑作集』所収の「三七全伝南柯夢」の序に引かれた陳翰「槐宮記」(273-74)である。曲亭馬琴(1767-1848)の『馬琴傑作集』は、博文館が1893年から97年にかけて発行した文学叢書、帝国文庫の第46編(1897)に掲載されている。国立国会図書館所蔵の第7版(1908)では、179~80ページである。(https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1882578/105?tocOpened=1, 最終アクセス日は2022年11月3日)。平川祐弘編の小泉八雲『怪談・奇談』の巻末の「原拠」には書き下し文も掲載されている(398-400)。なお、布村弘によれば、ハーンは『怪談』の「序文」で「安芸之介の夢」を「確かに中国起源」(*Kwaidan* 9)と呼んでいるだけであり、原拠を特定するのは容易ではなかった。以上の点を踏まえ、布村は自分が「安芸之介の夢」の原拠として「槐宮記」と断定するに至る過程について述べている(布村 75-79)。
- 4) 『日本国語大辞典精選版』第2版第3巻「槐安の夢」(152)には、「槐宮記」のプロットが記され、主人公の淳于棼が赴いた「槐安国とは、槐の木の下に穴にいる蟻の国であり、

- 南柯郡とは、その木の南向きの枝であったという、唐の李公佐の「南柯記」による故事から」と追記されている。さらに、「はかないことのたとえ」に使用するという説明もある。
- 5) アト・ド・フリースの『イメージ・シンボル事典』によると、“cedar”には、「王の尊厳」、「不朽不滅」、「豊穡」(115) という意味がある。ハーンは「槐」を、西洋人に馴染みのある木にただ置き換えるのではなく、その木の下にあると設定した蟻の社会が尊むべき王に支配され、永遠とも言えそうな繁栄を誇っていることを匂わせているのではないだろうか。
- 6) 「夏の日の夢」からの引用は、引用文献に挙げている Cosimo 版 *Out of the East* に依拠している。
- 7) 「夏の日の夢」において、ハーンがどのような視点で浦島伝説を再話しているか、浦島にどのような思い入れを抱いているかについては、矢次「夏の日の夢」における避難」Ⅲ「ハーンと浦島」(136-41)を参照。
- 8) 「リップ・ヴァン・ウィンクル」からの引用は、引用文献に挙げている *The Sketch Book* に依拠している。
- 9) 引用文献一覧に挙げている Marie Heaney 編 *Over Nine Waves: A Book of Irish Legends* に収録されたヴァージョンで、オシーンは「青春の島」で3年間程度のつもりが、実際には300年の時を経ており(219)、故郷アイルランドの地面に触れてしまったことをきっかけに、地面に沈み込むかのように身体が縮小し、視力を失った老人になってしまう(221)。この箇所に限らず、「青春の島オシーン」からの引用はこの版に依拠している。
- 10) 「蝶」からの引用は、*Insect Literature* に依拠している。
- 11) 王と思われる「巨大な蟻」が「黄色っぽい羽根と長くて黒い頭」を持っている理由については、布村(84)を参照。
- 12) ハーンは「一寸の虫にも五分の魂」という日本の諺を、「草雲雀」(“Kusa-Hibari,” *Kotto* 1901)のエピグラフ(“Issun no mushi ni mo gobu no tamashii”)として用いている。ハーンは人間以外に魂の存在を認めないキリスト教徒の読者に、文字通り、虫にも魂があることを示唆しようとしていると考えられる。なお、19世紀のイギリスにおいて、昆虫が心(mind)を持つかどうかは議論的だった。クラークによると、それに先立つ18世紀のイギリスでは、チャールズ・ダーウィン(Charles Robert Darwin, 1809-82)の祖父エラズマス・ダーウィン(Erasmus Darwin, 1731-1802)は蜂や蟻の行動に「理性の力(the power of reason)」を見出していた(Clark 36)。
- 13) 「イギリスという蜂の巣」の製作年は、Clarkの「画像一覧」(“Figures”) 4.8 (ix)を参照している。
- 14) 「蟻」からの引用は、*Insect Literature* に依拠している。
- 15) 「蚊」からの引用は、*Insect Literature* に依拠している。

引用文献

Clark, J. F. M. *Bugs and Victorians*. Yale UP, 2009.

- Heaney, Marie ed. *Over Nine Waves : A Book of Irish Legends*. Fabor and Fabor, 1994.
- Hearn, Lafcadio. *Insect Literature*. Swan River Press, 2020.
- . *Kwaidan : Stories and Studies of Strange Things*. Bernhard Tauchnitz, 1907.
- . *Out of the East : Reveries and Studies in New Japan*. Cosimo, 2006.
- Irving, Washington. “Rip van Winkle.” *The Sketch Book*. Collins’ Vlear-Type Press, no date of publication. pp. 29-50.
- 牛村圭「虫」『小泉八雲事典』恒文社, 2000. pp.630-31.
- . 「虫めぐるハーン」『比較文學研究』47 (April 1985) : pp. 156-64.
- 大塚英志『「捨て子」たちの民俗学——小泉八雲と柳田國男』角川学芸出版, 2006.
- 小西正泰『虫の文化誌』朝日新聞社, 1992.
- 土居光知『神話・伝説の研究』岩波書店, 1973.
- 南條竹則「解説」『怪談』ラフカディオ・ハーン著, 光文社, 2018. pp.255-93.
- 布村弘『『槐宮記』と「安藝之介の夢」』『比較文學研究』54 (November 1988) : pp. 75-85.
- 平川祐弘「原拠」『怪談・奇談』小泉八雲著, 講談社, 2021. pp.357-462.
- フリース, アト・ド『イメージ・シンボル事典』山下主一郎他訳, 大修館書店, 1984.
- 矢次綾「ラフカディオ・ハーンの「夏の日の夢」における避難——海, 空, 青, 「浦島」伝説, 永遠に女性なるもの」『松山大学論集』vol. 34, no. 5 (December 2022) : pp. 131-46.